

世界最大の両生類

オオサンショウウオ ②

国の特別天然記念物として保護されている「オオサンショウウオ」は、近年、外来種である中国原産の「チュウゴクオオサンショウウオ」との交雑問題という新たな問題が起っています。



吉井川で捕獲された交雑種



昼間の巣穴調査



交雑種の隔離飼育

京都市の賀茂川では、在来種はほぼいなくなるたといわれるほど交雑が進んでおり、三重県でも交雑問題が深刻となり、捕獲調査が実施され

国内の河川になぜ外来種が存在するのかというと、在来種であるオオサンショウウオが特別天然記念物となり、捕獲することができなくなつたため、昭和四〇年代頃に中国からペットや食用としてチュウゴクオオサンショウウオが大量に輸入されたことがあり、こうした個体が逃げ出したり、飼育できなくなったものが放流され、野生化して繁殖した可能

ています。岡山県でも平成二九年の県教委の調査により、町内の吉井川上流部において交雑種が確認されました。

性が指摘されています。

チュウゴクオオサンショウウオは、在来種と比べて動きが活発で気性も激しいため、放っておくと在来種の生息する場が奪われ、交雑化がどんどん進んでいくことになりました。そのため、町内でもこれ以上交雑が進まないよう、平成三〇年から落合橋（羽出）から杉橋（杉）までの区間を対象に捕獲調査を開始しました。

チュウゴクオオサンショウウオと在来種の違いは、肌の模様

で、在来種はベージュのような肌色に大きな黒い斑紋がある個体が多いのですが、チュウゴクオオサンショウウオは褐色の肌に薄い色の斑紋があることが大きな特徴です。それ以外でも、皮膚のイボの付き方や、目の大きさなど細かい違いもあります。交雑が進めば外見は在来種とそれほど変わらない交雑種もいますので、見た目だけでは判断できません。

そのため、捕獲した個体は尻尾の先を一mm程度切り取り、DNA鑑定を行います。そして、鑑定の結果、在来種と判明した個体は捕獲した場所へ放流し、外来種もしくは交雑種であった場合は水槽で隔離飼育を行います。また、捕獲した個体にすべてマイクロチップを埋め込みますので、これで在来種の活動範囲や分布

を知ることができます。

これまでの町内の捕獲調査では、のべ約一二〇個体を捕獲し、そのうち約四分の一が交雑種でした。チュウゴクオオサンショウウオそのものは見つからず、いずれも孫の世代にあたる交雑種であることが明らかになっています。

町内に外来種が入ってきた時期や原因は特定できませんが、七〇cm前後の孫の世代の交雑種が存在するということは、かなり古くから外来種の野生化が進んでいた可能性もあります。

町としては、在来種の保護を最優先して、交雑種を捕獲して隔離していかなければなりません。チュウゴクオオサンショウウオ自体も原産国の中国では食用のための乱獲と環境汚染により絶滅の危機に瀕しており、将来的にはチュウゴクオオサンショウウオのDNAを持つ個体自体が貴重になってくる可能性もありますし、交雑問題も元を正せば人間の勝手な行動によってもたらされた人災です。今後も増加していくであろう交雑種をどのように取り扱うのか、どう活かせるかを検討することも、その原因を作った私たち人間の責務であると考えます。

協力：(一社)奥津風の会、鏡野町オオサンショウウオ保護対策委員会

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下
電話(0868)54-7733